

聖書：ローマ 12：12～13

説教題：望みを抱いて喜び

日時：2016年5月8日（朝拝）

自分にとって特別な聖書の御言葉というものが皆さんそれぞれにあると思いますが、ローマ書 12 章 12 節は私自身にとってそのようなみことばの一つです。なぜこのみことばはある時の私にそんなに大きなインパクトを与えたのでしょうか。それはその時の私は望みを失っていたからに他なりません。色々なことを試みても、思うように事が進まない。困難ばかりが次々に現れる。この状況に対応しようとする自分を見つめても打開できるような力やエネルギーはない。この調子ではこの先どうなることか。良い将来を思い描けず、早く主の再臨が起こらないかとばかり考えていました。

そんな中、どんな言葉でもいいから今の自分を助け、支えてくれるみことばはないかと必死に聖書を開いていた時に目に留まったのがこの 12 章 12 節でした。ここに「望みを抱いて喜び」とあります。それがなくて苦しんでいるのに、これは何という無茶な注文を突き付けてくるみことばか。最初はそう思いました。しかし少し思いを巡らしている間に考えが変わって来ました。待てよ、この喜びとはクリスチャン全員が共通して持っている喜びのことではないだろうか。どんな状況にあってもキリスト者が必ず持っている希望があるということではないのか。そしてこの言葉は私に問うて来たのです。「あなたも望みを持っているでしょう。あなたも望みを持っているでしょう。それをしっかり胸に抱くならあなたも大いに喜ぶことができるはずでしょう。」と。そう問われてそれは一体何だっただろうかと考えました。その時に私の前には全く新しい視界が開けたのです。

その望みとは、やがて私は必ず最後の救いの状態に導かれて天の御国で永遠に神と共に住むということです。罪を全く聖められて、イエス・キリストの似姿に変えられて、栄光のからだを頂く。神は私の目の涙をすっかりぬぐい取って下さり、もはやそこには死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。以前のものがすっかり過ぎ去った栄光の御国の生活が自分を待っているということでした。5 章 2 節：「キリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。」 8 章 18 節：「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」 8 章 30 節：

「神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」

私たちにはこの地上で色々なことがあるかもしれませんが。しかしその「最後は確定している」のです。この光の下でこの地上における一時的な自分の人生を見つめ直すのです。Ⅱコリント4章16～18節：「ですから、私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。」 私たちは苦しみの中にある時、その状態がいつまでも続くかのように考えやすいものです。しかしその最後は決まっているのです。その最後に私たちが到達する地点から今の地上の人生を捉える者でなければならない。私はその時、俄然勇気が出てきました。自分には何と素晴らしい将来が確定していることかと喜び躍り上がりました。望みはどこにあるだろうかなどと嘆いていたなんて、一体自分は何をやっていたのか！とにかく日ごとに私は着実に素晴らしいゴールに近づいている。昨日よりも今日、今日よりも明日、益々栄光に近づいている、と。これはイエス・キリストを信じるすべての人に与えられている希望です。

この望みがはっきり見えて来た時、二つ目の「患難に耐え」という言葉も非常な励ましを与えてくれました。私たちは知らず知らずのうちに、信仰がしっかりしていれば物事はうまく行くと考えがちです。人々に良い証しを立てて評価され、この世的にも祝福されると。そのため、自分がうまく行っていないのは何か異常事態であるかのように考えてしまいやすい。しかしそうではないのです。この12節は希望を持っていることと、その自分が患難の中にいることとは矛盾しないと教えてくれます。だから今、自分が苦しみの中にあることを恥じる必要はない。やがて栄光に入る者が今は患難の中にあるというのは至って普通のことである。だから心を弱くしてはならない。

そしてこの患難は私たちに対して積極的な良い目的を持っています。5章3～4節：「そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。」 私たちは患難を通して忍耐を培われ、品性を練られ、整えられて行きます。すべてがうまく行っている状況では私たちは高ぶりやすい者です。このようにうまく行っているのは

私のおかげである、私がしっかりしているからであると。しかし試練が来ることによって私たちは自分の弱さに気づかされます。自分は思ったほど立派でないことを悟られます。そして困難の中で砕かれることによって、自分の力ではなく、ただ主に頼るところに私の力があるということを経験的に知るように導かれるのです。詩篇 119 篇 71 節：「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。」 私たちもこれまでの信仰生活を振り返って、神との深い交わりへと導かれ、信仰において大きな前進と成長を遂げたのは、恵まれた状況の時よりも、試練や困難の時を通してではなかったでしょうか。

そして私たちにとっての慰めは患難は父なる神からの愛によるプレゼントであるということです。ヘブル書 12 章には「父が懲らしめることをしない子がいるのでしょうか。」とあります。信仰を持つ私たちには患難が与えられるのは、私たちが私生児ではなく、神が子として扱って下さっている証拠だと言うのです。霊の父は私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして懲らしめられます。すべての懲らしめは、その時は喜ばしいものではなく、かえって悲しく思われるものですが、後になるとこれによって訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。そして神は私たちに決して耐えられない試練を与えないとも約束しています。もちろん私たちは試練に直面すると、これに私はとても耐えられそうにないと思います。もし最初からこれくらいなら耐えられそうだと思うなら、それは試練にならないでしょう。そう思えないものだから、それは試練となり得ます。その試練を通して神は私たちがやがての御国に入るにふさわしい者へと造り変えて下さるのです。その究極的な素晴らしい栄光のゴールに今の患難がつながっていると思うなら、私たちには俄然勇気が湧き起こってくるのではないのでしょうか。その将来を見つめて喜ぶゆえに目の前の患難さえも喜ぶということができるのではないのでしょうか。

そういう中で私たちのなすべきことが三つ目の「絶えず祈りに励みなさい。」というものです。私たちは将来の栄光を理解し、試練はそこに至るためのプロセスであると知り、慰めを受けますが、それだけでは力強い歩みはできません。目の前の試練をくぐり抜けるためにはどうしたら良いのでしょうか。それがこの「絶えず祈りに励みなさい！」ということなのです。これもその時の私に非常な慰めを与えてくれました。そうか、自分だから神に祈れば良いのだ！自分の力で乗り越えようとするのではなく、神におすがりすれば良いのだ！と。祈りは私たちの弱さを支えるための神の恵みの手段です。自

分に力がないと思うなら、神に祈ってよりすがればいい。祈りは決して私たちから神に向かって語る一方通行のものではありません。祈りは神との双方向の交わりです。私たちは祈りの中で神に向かって語るだけではなく、神も私に語って下さるということを体験します。そして神から来る力によって試練を乗り越えるように導かれるのです。暗い夜道を小さい子どもが一人で歩くのは不安でしょう。しかし信頼する人が一緒なら違って来ます。子どもはその暗い夜道でいつもより多くしゃべるかもしれません。そしてその会話は子どもにとっては慰めです。なぜならこの暗やみの中で自分は一人ではないと知るからです。私たちも同じでしょう。祈っても自分を取り巻く状況はすぐには変わらないかもしれません。しかし私とともにいてくださる方がいる。しかもその方はすべてに勝る力強い全能の神である。その方に信頼して、これから先のこともお任せし、一步一步、前に足を進めて行けばいい。私たちは絶えず祈る生活を通して、神が下さる力によって強められて、目の前の試練をついには乗り越え、栄光に至る道へ進んで行くように導かれるのです。

さて以前は12節にのみ注目しましたが、後にこれは13節の「聖徒の入用に協力し、旅人をもてなさない。」というみことばとも関連があることに気がつかされました。それはどういう関係でしょうか。それは患難にあっているのは私一人だけではないということです。仲間である兄弟姉妹も同じく様々な困窮した状態、厳しい状況に置かれている。そのことに目を上げている者として、自分のできる助けをするということです。欠乏し、苦境にある兄弟姉妹を覚えて、愛の支援、愛の贈り物をするということです。私たちはこういうことは経済的な余裕のある人がすることだと思いがちです。そうではない今の私の状況では、むしろ分け与えてもらいたいくらいだと。しかしこれはどんな人に言われているのでしょうか。それは12節で見たように、自らが患難の中にある人にです。「望みを抱いて喜びなさい」と言ってもらわなければ、困難に囲まれて失望しそうな人に対してです。そういう苦闘の内にある人が、主にあつて希望を抱き、神に信頼する慰めに生きているがゆえに、同じ戦いをしている兄弟姉妹を思いやって、この愛の実践をするようにと勧められているのです。

もう一つここで言われているのは「旅人をもてなさない。」 当時は今日と違って、旅をすることには色々な危険が付きまといました。特に安全に泊まる場所を確保することは難しい問題でした。そういう意味で旅人は最も必要を覚え、困っている人の代表です。そのような兄弟姉妹を迎え入れてもてなさないと言われていいます。もてなしは骨

の折れる奉仕です。時間的な犠牲、経済的な犠牲、肉体的・精神的犠牲も払わなければなりません。これをしなくていいならずと楽で自由な生活を送ることができます。しかし原文では「追求しなさい」という強い言葉が使われています（口語訳：「努めて旅人をもてなしなさい」）。聖書においてもてなしは特に勧められています。特に小さい者のひとりにしたのはわたしにしたのですとイエス様は言っています。お返しすることができないような人に良くしてあげることは主にすることであって、主がやがての日にその人に報いてくださると言われています。またルカの福音書 16 章では、困っている兄弟姉妹をもてなし、助けるなら、その人があなたをその人の永遠の住まいに迎えるとあります。たかが地上の 100 年の間に私たちのしたことが永遠に覚えられ、感謝され、素晴らしい記憶となってやがての天における私たちの交わりを祝福することになります。いかにこの地上における愛のわざが永遠の将来において大きな意味を持っていることでしょうか。その愛に生きるようにと勧められています。

今日のみことばを通して問われることは、私たちの心はどこを向いているのかということ。この地上のことに心がへばりついているのか。それとも信仰によって目を高くあげて目的地をしっかりと見ているか。遠い将来のことなど、どうなるか分からない不確実なことだとこの世の人は言うでしょう。しかしイエス様の贖いのみわざは私たちの最終的な救いを確実なものとして勝ち取ってくれました。この世の人生で紆余曲折があっても、この素晴らしい最後が不動のものとして私たちのために勝ち取られていること、これこそ私たちの日々の歩みを支える慰めであり、希望です。そこではどんなに素晴らしい生活が私たちを待っていることでしょう。そこには夜がありません。神である主が私たちを照らされるので、ともしびの光も太陽の光もいらない。神の栄光が都を照らし、小羊が都の明かりです。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。私たちはそこで栄光の神とまみえて、永遠に住むのです。そのことを見つめていればいるほど、私たちは希望を告白し、患難に耐え、祈り、また同じ戦いにある兄弟姉妹を心にかけて支えるという生き方ができる。I テサロニケ 5 章 8 節：「救いの望みをかぶととしてかぶって」。この「望み」というかぶとをしっかりとかぶってこそ、私たちはキリストの兵士としての戦いを戦うことができます。イエス様は一人一人にこの希望のかぶとを下さいました。これを取り外して下をうつむく者ではなく、これをしっかりとかぶっている私たちであることができますように。そしてかの日を見据えて喜びを持って祈り続け、また兄弟姉妹と励まし合い、一日一日栄光へと近づく天への凱旋の歩みを今週も続けて行きたいと思うのです。